

挽夏

菩提寺の大銀杏の根元に
黄色くまるい実が散らばって
次々と乗りつける参列者の車に轆かれ
平たく破れているものもある

足元に目を落としもせず
あざやかな正確さでよけながら
ひそめた声でさかんに語り合いつつ行き交うは大人達
幼子は片手で小さな鼻を大げさにつまみ
もう片方を親の手にくるまれながら
ぎんなん蹴り蹴り引っ立てられる

帰りの車も家の三和土も
可愛い靴が連れ帰った汁で
しばらくは臭うことだろう

仰ぎ見れば
いまだびっしりと緑の葉の茂る大木

あの子達の曾祖父母だか祖父母だかは
中空から見下ろして笑っているだろう
それともまだ新しい自身に戸惑い
あきらめられず
独りでさびしがっているのやも

三とせ前の我が父は何を想って在ったのか

おおぜいが今年も彼方へ発ったらし
いよいよきびしい夏も去りぎわ